

(論 說) ○日本産擬螳螂科の研究 (中原)

●日本産擬螳螂科 (Mantispidae) の研究

中 原 和 郎

10

本邦の擬螳螂科に就きて研究の結果の發表せられしものは、一九一〇年三宅理學士が五種を掲げられ、ついで岡本農學士が十二種を記されたるものと、その以前に、R. MACLACHLAN, 松村博士、J. NAVÁS の三氏が各一種づつ記載せられたる断片的の記事あるに過ぎず。此等の諸氏の種名全部を合すれば、十四種となる譯なれども、不幸にして、種々なる事情の下に、異名同物と看做さる可きもの發見せられ、又從來使用し來れる學名の不當なる事明になれるに依り、多少種の數を減じ得ると共に、一方には新らしき發見により種の數の増加を來すに至れり。余は昨年の夏以降少しく研究し來りし事項を一括して茲に報告せんと欲するものなるが、初めに當り一言す可きは、理學士三宅恒方氏の御厚意により東京農科大學の「マンチスバ」の採集品を検し得て非常に好都合なりし事と、此文を公にするに就て飯島博士より賜りたる忠言の大いに有益なりし事なり。

●Genus *Eumantispia* OKAMOTO.

Zool. Anz. Irl. XXXVII, Nr. 16, p. 299, (1911).

頭部常形、觸角細くして連鎖狀。前胸は細長く、中肢及び後肢の爪の先端は普通四乃至五個の齒にて終はる。

前後翅共徑室は稍廣く、五個以上(八個以上のものを見出し得ず)の徑室に分たれ、前翅第一室は二或は三個の徑小脈を放出し、後翅の副中脈と内縁脈稍遠く離れて、一個の横脈により結合せらる。

此屬は日本より記載せられし二種 *Eumantispia harmandi* (NAVÁS.) 及び *Eumantispia nanae* (MIYAKE) により代表せらるるものなり。極めて *Mantispia* 屬に類似せるも、徑室の數前翅に甚だ多きにより區別す可し。

(一) カマキリモドキ

Eumantispia nanae (MIYAKE)*Mantispia nanae* Miyake, Journ. Coll. Agr. Imp. Univ. Tokyo, Vol.

51, No. 3, p. 216, Pl. XII, figs. 4, 4a, 4b, ♀, (1910).

Eumantispia nanae Okamoto, Zool. Anz. Bd. XXXVII, Nr. 16, p. 294, (1911).

余は未だ本種を見るの期なし。嘗つて江州伊吹山にて捕獲され、その標本は目下、岐阜の名和昆蟲研究所に保存せらるると云ふ。

(二) キカマキリモドキ

異名オホキカマキリモドキ

Eumantispia harmandi (NAVÁS.)*Mantispia harmandi* NAVÁS, Mem. de la Real. Acad. de Cienc. y Art.

J. Bar. Vol. VII, No. 10, p. 480, (1909).

Mantispia sasakii MIYAKI, Journ. Coll. Agr. Imp. Univ. Tokyo, Vol. ii, No. 3, p. 217, Pl. XII, figs. 2, 2a, 2b, 8, (1910).

Mantispia sasakii OKAMOTO, Zool. Anz. Bd. XXXVII, Nr. 16, p. 294, (1911).

Mantispia sasakii, OKAMOTO, Ibid. p. 295.

Mantispia harumudi NAKAHARA, Zool. Mag. (動物學雜誌) Vol. XXIV, No. 284, p. 235, figs. 1—5, (1912).

本種に就ては、本誌本年六月號に詳記せり。

● Genus *Mantispia* ILLIGER.

Verz. Käfer Pflanzens., p. 499, (1796).

WESTWOOD, Trans. Ent. Soc. Lond. new ser. 1, p. 252—53, (1852).

WALKER, List of the Specim. Neuropterous Ins. Coll. British Museum. Pt. ii, p. 213, (1853).

ENDERLIN, Stett. Entom. Zeit., p. 344—45, fig. 1, (1910). (Subgen.

Mantispilla ENDERL. Ibid. Subgen. *Mantispia* Ill., ENDERL. Ibid.)

OKAMOTO, Zool. Mag. (動物學雜誌) Vol. XXII, No. 266, p. 534, fig. 1, (1910).

大體前屬に等しく、前胸に刺毛及び前胸片を有せず。前肢の跗節に一爪あれど、脛節第一節の距と爪間の板とを缺く。中肢後肢の爪端は四齒に分るゝも、多少の例外はあるものゝ如し。兩翅徑室は廣く（前屬に比するも稍廣し）、徑室の數は例外なく二、前翅第一徑室は一乃至二個の徑小脈を放出す。後翅第二副中脈と内縁脈とは一點に於て相接するか、或は相癒合するか、或は甚だ短少なる横

脈により結ばる。

ENDERLIN 氏は本屬を第一徑室(前翅)より放出する徑小脈の數の一個なるか、二個なるかにより、之を二つの亞屬に分てり。

徑小脈數一……………Subgen. *Mantispilla* ENDERL.

徑小脈數二……………Subgen. *Mantispia* ILLIGER.

岡本農學士は尙 *Mantispilla* 亞屬の者は *Mantispia* のものより、遙かに小形なるを附け加へられたり。

然るに、此の二の點のみにては、その何に屬せしむ可きものなるやを見分くる能はざる場合あり。次に述べんとするヒメカマキリモドキの如きは、岡本學士は明かに *Mantispia* の方に入れられしも、余の標本中には、前翅第一徑室に於て、唯一個の徑小脈を放出せるもの、即ち明かに *Mantispilla* に入る可き性質のもの二個あり。その大いさに就て見るも、本種は體長及前翅長比較的大形のものに於て一四耗、前翅の幅及び前胸の長さ四耗位なるに ENDERLIN 氏が小形なる可き（岡本氏によれば）*Mantispilla* 亞屬の中に記載せる *M. nidervaldi* ENDERL. の如きは、體長一五耗、前翅長一二耗、前胸長四・五耗もあり。反對に大形なる筈の *Mantispia* 亞屬中には、體及び前翅の長さ八・五耗前胸長二・三分の二耗に過ざる *M. latifrons* ENDERL. の如きものあり。

之により、余は本屬を二亞屬に分つことを全く無意味なりと云ふに憚からず。少なくとも斯の如き小區劃の全

然不必要なるを断言せんとす。

日本に産する種に就ては、岡本學士は三種を認めらるるも、余は次の二種なるを信ぜんとす。

(三) ヒメカマキリモドキ 異名チロカマキリモドキ

Mantispa japonica N. LACHN.

Mantispa japonica N. LACHNAN, Trans. Ent. Soc. London, p. 178-79, (1875); MIZUKI, Journ. Coll. Agr. Imp. Univ. Tokyo, Vol. II, No. 3, p. 200, Pl. XII, fig. 5, 5a, 5b, (1910); OKAMOTO, Zool. Mag. (動物學雜誌) Vol. XXII, No. 266, p. 535, Pl. XVII, fig. 3, 4 (1910); OKAMOTO, Zool. Anz. Bl. XXXVII, Nr. 16, p. 296 (1910).

Mantispa diminuta MATSUMURA, Syst. Ent. (昆蟲分類學) Vol. I, p. 169, (1907); OKAMOTO, Zool. Mag. (動物學雜誌) Vol. XXII, No. 266, p. 536, Pl. XVII, fig. 6, 6, (1910); OKAMOTO, Zool. Anz. 13, XXXVII, Nr. 16, p. 296 (1911).

Mantispa dimidiata MATSUMURA, List. Inj. Ins. Jap. (日本益蟲目錄) p. 36, (1907.)

diminuta の松村博士の記載は極く簡單なるも、三宅學士は、先づ之に一致する東京農科大學の一標本を研究せられ、*japonica* との間に種の差異を發見し得ざるを以つて、その精こき記載の出づる日まで、之を *japonica* の aberrant form とすべしと云はれたり。

岡本學士は *diminuta* を詳細記載し、翅脈の構造、縁紋の色、腹部の斑紋等により別種と認むる由を記された。然れども、此等の諸點の中、翅脈の構造は *Mantispa*

屬中の二亞屬の條に述べたる如く、余は之を認めず。縁紋の彩色には變化あり、嘗て記せし如く、矢野理學士より得たる東京産の標本の如き著しく黄色のものすらありたれば、之により區別を立つるを得ず。腹部の斑紋にも、判然たる區別の認む可きなし。MACLACHLAN氏と岡本氏との記載を比較するも、此所ぞと思はるる點なく、又實際に於て、標本の新鮮ならざる時は、腹部の斑紋の甚だ不明瞭なるは事實なり。

余は茲に、三宅學士が *diminuta* を *japonica* のアテラントフォームとせられし卓説に賛し、此の兩者を同一種なりと断定せんとす。

頭部は黄色、暗黄色乃至赭黄色、下唇鬚、小腮鬚は淡黄褐、その先端は暗褐を呈す。顔に一條の黒帯を縦走し、後頭より上唇に達す。後頭には暗褐斑あり。頭頂には一黒斑紋を有す、その形は、不正四角形のもの多きも、中には蝠蝠の翼を擴げたるが如き形のものもありて變化多し。觸角は約三十節、基部は暗黄乃至赭黄、他は黒褐乃至黒色をなす。前胸は極めて細長く、暗褐、淡き赭黄乃至黒褐、前膨部は淡き赭色乃至黒褐色、左右に各一個の黄色或は暗黄紋を裝ひ、その後方に黄色の二小紋突起を有す。中胸及び後胸背面は淡赭色乃至黄褐色、その前方は黄色、稜狀部及び後稜狀部は黄色乃至暗黄色をなす。前肢淡黄、腿節は暗褐、その内側は黒褐色をなすもの多し。跗節及び後肢脛節はその先端の部分のみ暗褐をなせり。中後兩

肢は黄褐乃至淡黄褐。爪の先端は何れも四齒に分る。翅は透明、脈は黒色、前縁、副内縁及び徑脈は黄色或は暗黄。縁紋は暗橙色乃至血紅色。前翅前縁室に六乃至八個の横脈を有し、第一徑室よりは一或は二個の徑小脈を放出し、後翅にありては、殆んど常に二個の徑小脈を出す。

第二徑室よりは、兩翅共に二又は三個を放出す。全翅弱く淡き紅緑を放射す。腹部の斑紋には變化あれど、腹背は黄色乃至暗黄色、中央に細き暗褐帯を縦走すれど、標本により、黒褐或は黒色に近く、太きこと多し。各腹節の後部は此の線と同色。腹面は黒褐或は少し之より淡し。雄の腹部末端に類似橢圓形の附屬物二個ありて黄色を呈し、その先端及び内側は褐色乃至暗褐色、その下方に大なるポット形の附屬物を具ふ。

體長、八一—四・五耗 前翅長、一〇—一四耗

前翅幅、三—四耗 前胸長、四耗内外

分布。本州、九州。

余は東京産のものを藏するのみなれど、東京農科大學にある磐城産のものを得たり。尙、PREYER氏は横濱に、矢野理學士は九州霧島山に、新渡戸氏は青森に、それぞれ捕獲せられたりと云ふ。

(四) タイワンチビカマキリモドキ

Mantispa formosana MATSUMURA (?)

Mantispa (*Mantispsilla*) *formosana* MATSUMURA, OKAMOTO, Zool.

(論 說) ○日本産擬螳螂科の研究 (中原)

Mag. (動物學雜誌) Vol. XXII, No. 266, p. 537, Pl. XVII, fig. 7. ♀, (1910); OKAMOTO, Zool. Anz. Bd. XXXVII, Nr. 16, p. 297—98, (1911).

余は未だ本種を見るを得られず、Philippine, Sumatra 等に産する *Mantispa luzonensis* NAVÁS, (Mem. Ac. Ic. Barcelona, Vol. 7, p. 479, 1909.) に非常に似たり。むしろ記事のみにては、その差異の果して有りや否やをさへ辨じ難き程なれば、遠からずして、多少學名の變更を見るに至ることと信ず。余は *formosana* を *luzonensis* の變種となせば、或は適當なんと思へど、未だ實物に接せざれば、疑を存して前出の名稱を用ふることとせり。

本種は松村博士により、臺灣南部に約十頭得られし由。

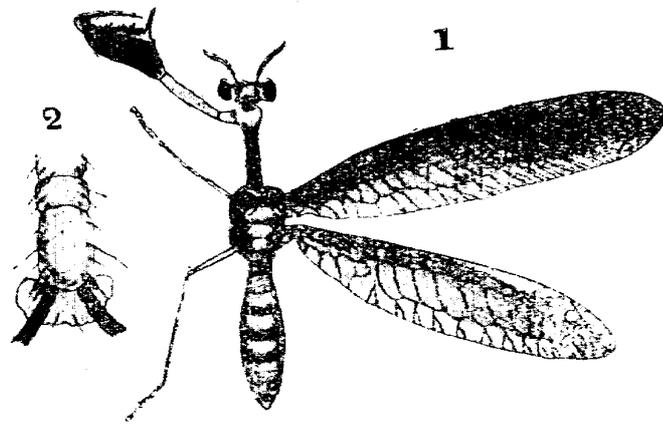
● Genus *Chimaciella*, ENDERLEIN.

Stett.-Entom. Zeit., p. 360, (1910).

OKAMOTO, Zool. Mag. (動物學雜誌) Vol. XXII, No. 266, p. 539, (1910).

頭部は一般の形にして、顯著なる點なし、前胸はあまり長からず、やく細し。觸角は左まで長からず、連鎖状をなす。前膨部は甚だ大きく顯著なり。中肢及び後肢の爪端は、四乃至七個の齒に分る。*Mantispa* 屬に比し、三角室は大。徑室は兩翅共に狭細、徑小脈の數多し。前翅第一徑室は三乃至五個の徑小脈を放出し、後翅第一徑室よりも、三乃至五個を放出す。前縁室は狭く、前翅に於てはその數十個に達せざるもの多し。此等は皆叉狀なる

ことなし。後翅の内縁脈と副中脈との距離は比較的大にして、長さ一横脈此の兩者を結び付く。本屬の種は少數なるが、その多くは日本及印度地方に産じ、他の少數は Mexico, Cuba 等の中央亞米利加に發見せらる。日本に産するもの左の五種あり。



1—トビカマキリモドキ(約三倍)
2—同上の肢先端 (約三〇倍)

(五) トビカマキリモドキ

Climaciella subfusca, sp. nov.

頭部赭黄色、額片に二黒條あり。小腮鬚及び下唇鬚は赭黄色。額及び頭頂は光澤ある淡黄褐色。觸角後方より複眼の内側に沿ひ、淺き二縦溝あり。後頭は暗黒色を呈

す。觸角は二十節より多し(先端の數節破損せり)。長さ頭長の約二倍。基節暗黄色、他は黒褐色なり。前胸は黒色、多くの横皺あり。前胸部は黄褐色、その前縁頂上は黒褐色。中胸及び後胸は赭黒色。稜狀部・後稜狀部は共に黄色。前肢は赭色。その腿節及び轉節には暗黒の微點多し。跗節・脛節及び腿節の内方は黄褐色。基節の外側は暗黄。中肢並びに後肢は淡赭色を呈し、脛節のみ暗黄色をなす。翅は透明。翅脈は帶褐黄色。前縁より中央外方に亘り、廣く淡褐色の一帶を有す。縁紋は稍々廣く、帶褐橙色なり。前翅前縁室に一個の横脈あり。第一徑室は、前翅・後翅共に三個の徑小脈を放出し、第二徑室に於ては、前翅にあつては三個、後翅にあつては二個の脛小脈を放出す。内縁脈は前・後翅共、その先端に於て叉狀をなさず。腹部は黄色、之に少し褐色を帶ぶ。各腹節の後部は一般に黒色なるを以つて、鮮明なる黒帶をなせり。

體諸部の長さは左の如し。

體長	一一・五耗	前翅長	一一耗
前翅幅	三耗	後翅長	一〇耗
前胸長	二・五耗		

本種は記載のみにて見れば、次に記すクロクビカマキリモドキ *Climaciella habutsuella* OKAMOTO に酷似せるも翅脈の構造、翅の斑紋及び色、大さ等により全く異なる。その他に、此種に近似のもの一つもあることなし。

余は只一九〇七年九月十七日に、井口宗平氏が播磨の

久崎村地方にて捕へたる一匹の雌を有するのみ。極めて稀なるものにして、未だ他に於て發見せられしを聞かず。

(六) クロクビカマキリモドキ

Cinnacielia habutsuella OKAMOTO.

Cinnacielia habutsuella OKAMOTO, Zool. Mag. (動物學雜誌) Vol. XXII, No. 266, p. 542, (1910); OKAMOTO, Zool. Anz. Bd. XXXVII, Nr. 16, p. 300, (1911).

頭部淡赭黄、口部は褐色、顔に二個の黑色條横走す。その上方のものは、觸角基部に達せり。一黒横條は後頭にも現はる。觸角は約二十八節。基部は黄色、先端はやく淡色。前胸は黑色。但し、標本により稍淡色にして茶褐色を呈するものあり。前胸部は黄色、その前縁は黑色なり。中胸に近かき部は少く黄色。中後兩胸は背部暗褐色、稜狀部並びに後稜狀部は黄色。肢は淡褐色、前肢脛部は黄色、腿節の中央は廣く黒褐色をなす。中後兩肢の爪の先端は五個の齒にて終る。翅は透明、前縁に沿ひ濃厚なる琥珀色帶あり。前角の所にて面積大なれど、一般に極く鮮明にして、色美麗なり。翅幅の數四分ノ一を占む。縁紋は暗黄褐。翅脈は更に少く黒じ。兩翅に於ける第一徑室は四個、時に一翅のみ三個のものあり。前翅前縁室には八乃至九個の横脈あり。前後翅共にその内縁脈先端に於て又狀をなせり。腹部は黄色、鮮明なる黒帶あり。雄の腹端上部に短かき黄色の附屬物あり、その先端黒褐乃至褐色なり。

(論 說) ○日本産擬蠶蟻科の研究 (中原)

體長、 一三一—一四耗 前翅長、 一二・五—一四耗
前翅幅、 三—三・五耗 前胸長、 三・五—一四耗
本種の標本は雌雄三個東京農科大學に保存せらる。中二頭は種子島、他の一頭は屋久島の産にして、何れもハブツ氏の採集に係るもの。余は三宅理學士の御厚意により、之等の標本を検するを得たり。

(七) ヒメツマグロカマキリモドキ

Cinnacielia 4-tuberculata (WESTWOOD.)

Mantispa 4-tuberculata (WESTWOOD, Trans. Ent. Soc. Lond., new ser. I, 264, Pl. XVII, fig. 1, (1852); WALKER, List Neuropterous ins. British Mus. pt. ii, p. 225, (1853); NEEDHAM, Rec. Ind. Mus. Vol. iii, Part iii, No. 12, p. 195, (1909).

Cinnacielia 4-tuberculata ENDERLEIN, Stett. Entom. Zeit., p. 361, (1910); OKAMOTO, Zool. Mag. (動物學雜誌) Vol. XXII, No. 266, p. 540, Pl. XVI, fig. 2, ♂, (1910); OKAMOTO, Zool. Anz. Bd. XXXVII, Nr. 16 即ち Nr. 16, p. 298—299, p. 298—299, (1911).

本種は印度 (Himalayas, Assam.) 及び我臺灣に産するものにして、余は此者らごきを林業試験場にて、見たる事あるも、精檢するを得ざりし。

(八) ツマグロカマキリモドキ

Cinnacielia miyakei OKAMOTO.

Mantispa 4-tuberculata MIYAKE, Journ. Coll. Agr. Imp. Univ. Tokyo, Vol. ii, No. 3, p. 218, Pl. XII, figs 1, 1a, 1b, ♂, (1910) (Nec. WESTWOOD).

(論 說) ○日本産擬蜻螂科の研究 (中原)

Climaciella miyakei OKAMOTO, Zool. Mag. (動物學雜誌) Vol. XXII, No. 266, p. 541, (1910); OKAMOTO, Zool. Anz. Bd. XXXVII, No. 16, p. 239, (1911).

頭部黄色、觸角茶褐色にして三十以上の節を有す。その先端の數節は淡色なり。顔に一黒横條を有し、上方のもの下方より太く、觸角の基部を横ざる。後頭後縁黑色乃至黒褐色なるも、此等は三個の小紋に分離することあり。複眼に沿ひ淺き溝、縦に走るも、その幅狭し。前胸は褐色、やゝ黒色を帯ぶるものと、深黒に變色せるもの等、標本により大いに差違あり。前膨部は黄色、その前縁頂は廣く(他種に比し)黒色乃至黒褐色、後縁の斑紋は褐色乃至黒褐なり。頸部の前端及び後端に近く、二個の小突起を列べ。その色黒褐或は茶褐色なり。後端は稍廣く黄色を呈す。中胸及び後胸は黒褐乃至黑色、稜狀部、後稜狀部は黄色乃至黄褐。肢は淡褐乃至黄褐。前肢腿節はその中央廣く黒色を呈す。中肢後肢の爪の先端は五齒に分れたり。翅は透明、前縁に沿ひ琥珀色の一帯あり、その幅翅の三分ノ一位を普通とすれど、時に極めて狭く且つ色の淺きことあり。前角の部分は、この帶廣く翅幅の平を占め、狭きものなきが如し。兩翅第一徑室は三乃至五、第二徑室は三乃至四の徑小脈を放出す。腹部は黄色。第一第二節は暗茶色、角をなせる一斑紋あり。第五第六節の後半は黒色。腹面は黒色、數節の縁邊黄色を呈す。但し腹部の斑紋は標本の古きものにては變化を來すこと

多し。尾端の附屬物は先端のみ黒褐色をなす。

體長 二〇—二二耗 前翅長 一八—二〇耗

前翅幅 三・五—四・五耗 前胸長 四・五—五・五耗

本種は廣く本州に分布せるものゝ如く、余は只井口宗平氏の播磨の標本三個を有するのみなれども、嘗つて京都・興越・美濃等に捕獲されしことありと云へり。

(九) オホカマキリモドキ

Climaciella (?) *magna* (MIYAKE.)

Mantissa magna MIYAKE, Journ. Coll. Agr. Imp. Univ. Tokyo, Vol. ii, No. 3, p. 214, Pl. XII, figs. 3, 3a, 3b, 3c, ♀, (1910).

Climaciella magna OKAMOTO, Zool. Mag. (動物學雜誌) Vol. XXII, No. 266, p. 542, (1910); OKAMOTO, Zool. Anz. Bd. XXXVII, Nr. 16, p. 234, (1911).

頭部赭黄、頭頂平かなり。口部は黄褐。眼邊に沿ひ、淺き溝を縦走す。觸角は太く、基部の二、先端の三節の淡赭黄なるを除き褐色。四十節を具ふ。基部に灰白の突起一個あり。前胸は長く、且つ太し、暗黄褐にして多少の横皺あり。X形をなせる褐色線を有す。前膨部あまり顯著ならず。頸部の兩端に二個づゝある小突起の間に、幽かに黄褐條を有す。中胸及び後胸は共に黄褐、少しく赤味を帯び、稜狀部及び後稜狀部はやゝ赭色に近し。肢は暗黄褐色、基節はその基部より三分の一の所にて、灰白色の環をめぐらす。腿節(前肢)はその縁邊及び基部内方のみ橙色

を帯ぶ。中肢及び後肢の爪の先端は三齒に分る。翅、透明、殆んど無色。脈は黃褐の所多し、各その基部より前縁に沿ひ、淡く黃褐に彩らる。縁紋は兩翅共にやく淡き赭黃色。第一徑室は前翅に於ては、五乃至六、後翅に於ては五。第二徑室は、前、後翅共、五乃至六個の徑小脈を放出す、前翅前緣室には十四乃至十五の横脈存在す。腹部はやく赤味を帯びたる黃褐にして、褐色・赭色等の斑紋、殊に三角形に近きもの、人形のもの等もあり。

體長

二七耗

前翅長

二八耗

前翅幅

九耗

前胸長

八耗

本種は九州産標本一頭、東京農科大学にあり。未だ九州以外の地に於て發見されしを聞かず。

岡本農學士は、本種を *Climaciella* 属に入れられしも、實際に標本を検する時は、此属に入るゝ能はざる性質あり。之は尙今後の研究に待つ可き問題なるが、兎に角、本種を *Climaciella* に入るゝ事は不正當なりと云ふ可し。

今、此種が同属の特徴に違反する點を擧ぐれば、

一、前胸太く、前膨部左迄大ならざる事、

二、中、後兩肢の爪の末端三齒に分るゝ事、

尙本種は世界に於て、最も大形なるものゝ一にして、

寧ろ、*Entanoneura* 属に非ざるかと思はるゝも、勿論此の属にも適合せず。或は新属を作る必要あるやも知れず。然れども、今之を決定せんことは、非常に困難なるを以

(論 說) ○日本産擬蟻螂科の研究 (中原)

つて、此所には疑問を存しながらも、*Climaciella* の中に加へ置くことくなじたり。

● Genus *Euchimacia* HENDERLEIN.

Stett. Entom. Zeit., p. 362, fig. 3, (1910).

(Okamoto, Zool. Mag. (動物學雜誌) Vol. XXII, No. 266, p. 542, fig. 4, (1910).

頭部常形。觸角甚だ肥大。前膨部極めて大きく、前胸一般に太く、且つ短かじ。中肢及び後肢の爪の先端は、五個乃至七個の齒を有す。

徑室は凡て狭く、之より出づる徑小脈は非常に多し。前翅に於ける幅内緣脈は、その先端に於て、叉狀に分枝せり。

余は未だ不幸にして、一つも本属の種に接せず。岡本氏に従へば、二種を産す。余はその中の一種の名稱に就て、多少の意見あれば、その事項に就き一言して置かんと欲す。

(十) オホイクピカマキリモドキ

Euchimacia badia OKAMOTO.

Euchimacia badia OKAMOTO, Zool. Mag. (動物學雜誌) Vol. XXII, No. 266, p. 543—44, Pl. XVII, fig. 5, 6, (1910); OKAMOTO, Zool. Anz. Bd. XXXVII, Nr. 16, p. 301, (1911).

本種は臺灣より發見せられたるものなり。

(論 說) ○日本産擬蟻螂科の研究 (中原)

一入

(十一) イクビカマキリモドキ

Euchimacia vespiformis OKAMOTO (?)

Euchimacia vespiformis OKAMOTO, Zool. Mag. (動物學雜誌) Vol. XXII, No. 266, p. 543, Pl. XVII, fig. 4, ♂, (1910); OKAMOTO, Zool. Anz. Bd. XXXVII, Nr. 16, p. 300, (1911).

本種に記事の上にて、よく一致するもの二種あり、即ち、

一、*Mantispa apicalis* LEW. ……小亞細亞

二、*Euchimacia partita* ENDERLEIN. ……北部セレンス

岡本學士は、*apicalis* とは、體色及び斑紋に相違あるを述べられども、*partita* に就ては、云ふ所なし。余は偶

然にも、*vespiformis* と *partita* とが、記載の上にて、非常に酷似せるに心付きたるが、何分標本なきを以つて之を斷定するに苦しむものなり。唯、此兩者は、全く同一種に非ずとも、互に變種的關係あるやも知れざれば、此所にては疑を存しながらも、岡本氏の名稱を用ひたる次第なり。

余は日本産擬蟻螂科を十一種とせしも、未だ此科には、研究の餘地あり。従つて後來の研究により、更に訂正と追加との行はるゝ事明かなりとす。

(完)